

## 造形活動を通じた地域との関わりとその教育的視点 越後妻有アートトリエンナーレ2003への参加から

小谷 充\* 石上城行\*\*

Mitsuru KOTANI\*, Shiroyuki IWAGAMI\*

It's Concerned with The Area by Art Work, and Its Educational Viewpoint.  
- From The Participation in Echigo-Tsumari Art Triennial 2003 -

[キーワード：美術教育, 社会教育, 地域連携, ワークショップ]

### はじめに

島根大学教育学部美術教育研究室は、学校教育における美術教育の指導者の養成とあわせて、社会教育での指導者を養成する生涯学習課程を要し、島根県立美術館や地域との連携による実践的プログラムの開発・研究をおこなっているところである。それは、学生個々の最終的な活動の場が異なってはいても、美術や造形活動の本質となるものが<人と人>との相互の関係性を基盤に成り立っているという認識にほかならない。従来の実技系教育で重視される学生個別の実技能力の育成だけでは、学校教育や社会教育の場における指導者の養成として十分でないとする立場にその重心を移行しているといえる。このように本研究室では、学生個々の反復的なトレーニングによる学びに終止するのではなく、他者との関わりによる多様な体験を通してより身体に根づいた学びのあり方を模索している状況がある。

一方、社会教育や地域との連携における美術のあり方は、その可能性をめぐって様々な問題に直面している。例えば、その一つが美術特有のヒエラルキーの問題であろう。近代以降につくりあげられたアカデミックな画壇を頂点とするピラミッド構造の刷り込みは驚くまでに強固であり、社会教育や学校教育の場を問わない美術に関わる様々な場面において障壁となっていることは否定できない。そのことは、いかにも「美術」が作品や作家至上の専門的な大前提の上に成立する領域であって、私たちが日常の些細な造形活動を「美術」と呼ぶには憚られるような膠着した状況に内在するものとして捉えること

ができるだろう。社会教育や地域連携の場で<美術>が有効に機能するためには、「美術」が抱え込んできた固有の問題を解消する努力なくしては成立し得ないと考えられるのである。

本稿で扱う「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003」(以下、芸術祭)は、新潟県越後妻有地区6市町村が新潟県との連携のもとに1997年に立ち上げた地域活性化事業「越後妻有アートネックレス構想」の一環である。2000年に開催された第1回展には16万人が訪れ、アートによる過疎地再生の試みとして国内外で高い評価を得た。第2回展では2003年7月20日から9月7日までの50日間、世界23ヵ国約150名のアーティストが、我が国有数の豪雪地帯で知られる越後妻有6市町村(新潟県十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町)全域762km<sup>2</sup>を舞台に作品を展開した。数あるプロジェクトのなかでも今回異例なのは、全国の教育系美術のゼミによる「松代商店街活性化プロジェクト」だといえるだろう。総合ディレクションを担当する北川フラム氏は、千葉県の4つのニュータウンを舞台に、美術・建築系大学のゼミにデザインを任せ「菜の花里美発見展」のディレクターを務めたが、今回はそうした美術家や建築家を養成するゼミとは別に、美術教育を担っていく教育系美術のゼミに参加を要請した。その構想について北川は以下のように述べている。

「いままでよくが戦略的にやってきたことというのは、要するに文部科学省ルートではなく、国土交通省ルートで美術市場を開拓することだった。だけど単純な話、全国に美術の先生が何人いるかを考えると、何万人単

\*島根大学教育学部美術教育研究室

\*\*島根大学教育学部美術教育研究室

位なわけでしょう。その多くは公募団体に属すか、地元の美術界のボスになるか、当りさわりのない学校教育をやっているわけ。われわれが関わっている美術の世界とはまったく別の世界なんですよ。それをシャッフルするというのがぼくの第2期の課題になってる。とにかく美術に関してはこのままじゃダメだから、子供たちに美術を教える先生から変えていくしかない。そこが美術を支える最大底辺だし、ねらいはそこだと思っています」<sup>1)</sup>

北川の発言自体が、すでに美術のヒエラルキーをア・プリオリなものとして享受している感がないではないが、重要なのはその構造自体を教育によって再構築していこうとする方向性にある。本学では、このような方向性に賛同したデザインと彫刻の合同ゼミで参加を表明したが、結果的に美術教育研究室に所属する過半数の学生が参加する実践プロジェクトとなった。

以上のことを背景として本稿では、まず今日的な「美術」をとりまく諸課題について言及し、その捉え返しとしての実践プロジェクトの目的と概要を明らかにし、造形活動の地域社会参加への可能性について考察する。その上で、芸術祭を社会教育や学校教育にも通底する学生の教育体験の場として捉え、実際の状況資料をもとにその教育的視点について検証していく。

## ・「美術」をめぐる今日的諸課題と実践プロジェクトの概要

### 1 領域に分断される美術

およそ私たち大人が美術に接しようとするとき、絵画、彫刻、デザイン、工芸という「領域」を手掛かりに解説を試みるのではないだろうか。または「平面か立体か」、「具象か抽象か」といった何かしら既存の枠組みにすくいって理解しようとするかもしれない。「美術」がいくつかの諸領域の総称であるかのごとき幻想は、大学を頂点とする学校教育のみならず、これほどまでに我々を拘束し続けている。長田謙一は、美術教育が「領域」に分断される硬直した状況について端的に述べている。

従来の美術教育は、それが「美術の教育」としてとらえられた場合でも「美術による教育」としてとらえられた場合でも、ある安定した領域としての美術を想定し、ある安定した技術・能力としての美術的能力を想定してきた。教科としての「美術」「図工」はこの安定に支えられて成立してきた。<sup>2)</sup>

また、この既存の「領域」の自明性について佐藤賢司は、子どもの造形活動の視点から以下の問題点を挙げている。

美術教育が、既存の文化的秩序を自明のものとして取

り込むだけではないという前提の上に立つならば、子どもの造形活動における、不断の意味の立ち現れが、身体的プロセスにおける対話の相手 粘土や紙や木が「つくられたもの」として、子どもの手を離れた時に否応無く組み込まれる文化的秩序としての「領域」や「分野」とだけに、果たして直接に結節しているのだろうかという疑問はどうしても残ってしまう。<sup>3)</sup>

以上の問題提示は美術諸領域の解体を意図するものでも近代以降の制度化された状況を無意味化しようとするものでもない。重要なのは、その自明性に対する疑いの眼差しをもつことが人間の営みにおける造形活動の可能性を追求するための示唆となり得るということにある。これらの示唆は、学校教育における美術教育や子どもの造形活動だけに限定されるものではない。なぜなら「美術」のもつ自明性や価値観は、私たち大人の行為すら束縛し続けている状況があると考えられるからである。私たち大人は、造形的な活動をおこなう場合、あらかじめ「美術」と「美術的」とを区分してとりかかると。社会教育施設における絵画講座や陶芸教室といったものは、前者の「美術」の文脈を強く意識するのに対して、日曜大工や年賀状の制作等は後者の「美術的」なものとして意識する。この「美術的」なるものは、美術のある安定した領域と措定しておおよそそこには含まれないとする無意識的な価値観によるものではないだろうか。つくられた制度としての美術の俎上で造形活動を語ろうとすると、私たちの造形活動のあるものは美術と呼ばれ、あるものは未分化で稚拙な行為の断片として隠蔽されることの自明性を再度問い直す必要があると考えられる。つまり、既存の領域に当てはめて人間の営みとしての造形活動を読み解こうとするのではなくて、人間の「行為」から造形活動を読む方向性が希求されているのである。

### 2 造形活動における共同性の障壁

「美術」において著作の所在という問題も根強い自明性の上に成立している。「美術作品が表現されたモノ 特定個人の内面を表に現した結果としてのモノ」であるとするれば、その特定の個人（作家）は誰か」という〈作品 モノ 人〉が一人称で扱われることの自明性は、子どもの絵画コンクールなどにも見られる美術作品であるための条件のように強固な価値観となって私たちを拘束している。現代美術の文脈においておこなわれる様々な共同製作の実践によって一見乗り越えられたかに見えるこの問題も、学校教育や社会教育の場に至っては共同性そのものを作品として自立させることの障壁となっていないだろうか。

この〈作品 モノ 人〉だとするロジックに欠落しているのは、「表現」という言葉の認識にあると考えられる。「表現」を一元的にとらえようとすれば「表に現す」のであるから個人の内面にある伝達すべき意味内容を前提として、それを他者が知覚できる記号に置き換えた状態をさす一旦はいえよう。しかしながら、例えば幼児が画用紙にクレヨンを叩きつけている行為が意味伝達を前提としているといえるだろうか。例えば子どもが何気なく叩いた空き缶の音に興味をもち、ピンはどうだろう、ドラム缶はどんな音だろうと行為が徐々に新しい意味をつくり出している状況はどうだろう。そういった子どもたちとそれと関わろうとする他者によって生成される〈意味場〉を私たちは表現と呼べないだろうか。中村雄二郎は「表現」について以下の見解を示している。

私たちの一人一人は、ただ個人として在るのでないばかりか、単に集団の一員として在るのもなくて、そのような意味をもった関係のなかにある、とこそいなければならぬ。だからこそ、自分では社会や政治にまったく関心をもちたなくとも、私たちはそれらと無関係でいることはありえないことにもなるのである。むしろそれは、物理的、自然的な関係ではなくて、意味的、価値的な関係である。そうした関係のなかでは、すべての態度、なにもしないことでさえ、いわば一つの行為になり、なんらかの意味を帯びてくる。(中略) このように私たち人間にとって、なにかをつくり出したり表現したりすることは、なんら特別のことではない。それは、生きるということとほとんど同義語でさえある。<sup>4)</sup>

このように〈関係性の場 = 意味場〉における行為が表現としてすでに成立しているという立場をとるとき、「表現」が単に一元的なコミュニケーション・ツールとして矮小化されるべきではないという認識を得ることができる。また、〈作品 モノ 人〉の関係性が一人称に限定される根拠は失われるとともに、創造され生成される事象が〈モノ〉である根拠も大きく揺らぐことになるだろう。このことについて川俣正は以下のように指摘している。

作品と呼ばれるものをオブジェ(物、物体)としての造形物から、インスタレーション、パフォーマンスなどの環境空間、身体表現、あるいはデジタルシステム空間などを含む創造行為全体から抽出されるものの総体として位置付けたい。

またそのための作品制作行為は、その都度可変的であるわけだから、その制作プロセスによって結果は大きく違ふだろう。だとすると、結果以上にその過程が、最終的な形を左右する大きな鍵を握っているとも言え

る。あるいはプロセスを把握することによって、結果に至らなくてもその行為性そのものの作品的価値はあるのではないだろうか。<sup>5)</sup>

以上のように川俣は「作品というものを固定したカテゴリーの中で考えるのではなく、つねに可変的な運動態として捉えること」の重要性を述べている。「作品」という概念が表現媒体あるいは表現の結果としての〈モノ〉にとどまることなく、〈関係性の場 = 意味場〉によって生成される〈コト〉であるという視点はきわめて重要な示唆を含んでいる。〈コト〉の生成もしくは〈コト〉を生成する〈意味場〉それ自体を生成していくということに様々な教育の場における既存の領域や分野によらない開かれた創作活動を保障し、共同参加・共同製作の意味を機能させる余地が生まれるのではないだろうか。

### 3 実践プロジェクト

#### 「松代・光のインスタレーション」概要

本実践の計画にあたって美術をめぐる今日的な課題にどのようなアプローチが可能であるかを模索する過程で本大学院修士生の実践「タイジくんプロジェクト」がひとつの契機となった。この実践は制作者が胎児型のオブジェを複数用意し、これを年次問わず複数の学生に「里親」として手渡し、自由に成形・着色してもらおうという共同参加・共同製作に重きを置いた内容である。そのなかでも成形過程でおこなわれる「磨く」という〈行為〉が、だれもが参加可能な〈場〉を生成する重要な要素であるとおもわれた。芸術祭にはゼミ単位でのエントリーが望まれたためデザインと彫刻の領域を冠した合同ゼミでの参加としたが、領域からの発想や領域による分担ではなく、〈行為〉からの発想を基盤にした様々な〈関係性の場〉を生成する方向性を明らかにした。さらに〈モノ〉を制作する〈場〉だけではなく、制作した〈モノ〉から地域を含めた他者との〈コト〉の意味生成の場を展開する方向性を確認した。

本実践プロジェクトでは、制作、装置(制作物)、意味場の展開の三つの段階を用意した。第一段階である制作では、「磨く」行為を基盤とした〈人とモノ〉の関わりを中心に参加学生の行為の積み重ねによって変化するモノの状況を身体性の拡張としてとらえ、その状況を同時的に共有する〈人と人〉の関係性の場となることを目的としている。具体的にはFRP成形した50体のオブジェの研磨作業とその支持体制作、第三段階のためのワークショップ計画などがその範疇となるが詳細は次章で述べることとする。この段階はまた、二名の担当教官のコラボレーション的な場としての可能性も考えられるが、そ

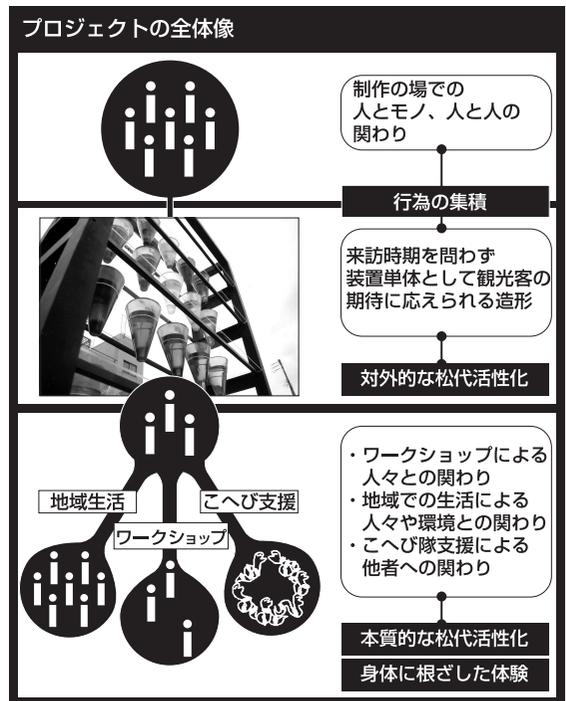
れよりもむしろ、教官もまた行為から展開する意味場の構成員としての位置付けである。「このオブジェは私が磨いた」というような部品の集合というだけではなく、参加者の行為の集積全体が装置を成立させているという捉えである。

第二段階は島根県で制作したオブジェや支持体を新潟県松代町の上町駐車場に設営し、造形物 モノ として地域住民や観光客に提示する段階である。芸術祭「松代商店街活性化プロジェクト」が重視する地域住民との関わりに加え、不定期に訪訪する観光客の期待に応える仕掛けとして制作物を会期中常設する。観光客による経済効果を含めたいわゆる対外的な商店街活性化の段階といえるだろう。この制作物を第三段階のための「装置」として位置付け、これをきっかけとして意味場を展開させていく。以下に発表したコンセプトを記す。

このインスタレーションは、松代の水と光をより強く提示するための二つの装置によって構成されています。一方の装置は水が入れられた50本のFRP製容器。日光によって透き通る水、夕日によって変化する色…。もちろん雨水がたまってあふれていくのもそこにある自然です。もう一方の装置は、40枚の鏡です。鏡は自然光を増幅する役目を担いますが、地域の人々や観光客の皆さんとワークショップを行い、鏡面にかたちを記述していきます。鏡面に描かれた様々なかたちは、もう一方の装置に、また時間の移り変わりとともにその周辺に光のかたちを増幅させていくことでしょう。相対して設置した二つの装置の峡間には、松代の光と時間、それぞれのかたちとそこにいる〈私〉という今ここでしか存在しない〈場〉が開かれるのです。<sup>6)</sup>

第三段階は設置した装置を中心に参加学生が現地に常駐し、意味場を展開させていく本実践の核となる段階である。予期される意味場は主に次の三つである。一つは設置現場において会期中毎日二時間に亘り地域住民や観光客との共同制作をおこなうワークショップである。〈人與人〉の関係性が直接的に〈モノ〉の形状へ影響を与えていく、美術の文脈におけるある意味定型化された〈関係性の場〉の生成手法だといえる。しかし、参加学生が経験しているワークショップ実践は子どもを対象が限定されており、不特定多数の〈他者〉を前提とした実践は既知の手法の再構築を迫られる場となると考えられる。

次にボランティア的な活動への参加である。本芸術祭は「こへび隊」というサポートグループに運営の多くが任せられている。芸術・建築系大学の学生が主体となり現地の小学校や役場施設を宿舎にして共同生活し、200件にのぼる作品の管理やアーティストの制作補助、各ト



リエンナーセンターの運営補助をおこなっている。本実践の参加学生は、会期中こへび隊宿舎で共同生活し、ワークショップ以外の時間をボランティア的な活動に充てることが予想される。参加学生はそれぞれの現地班で話し合って関わり方を判断するが、ワークショップおよび他作品の見学とこへび隊支援のバランスなど共同体内での利害を背景として、〈他者〉を強く意識し調整を迫られる〈関係性の場〉を生成することになるであろう。

いま一つは、地域で生活することによる住民との〈関係性の場〉である。参加学生は会期中の50日間、各班7名前後一週間を基本として設置場所の松代町と宿舎のある十日町市山間部で生活する。過疎化の進んだ松代町は、商店街といっても住居兼個人商店が大部分を占め、空家も少なくない。十日町山間部の宿舎は小学校を利用してはいるが、松代町や十日町市中心街まで10kmほどの隔離された場所にある。つまり、他者と深く関わらなくても生活可能な都市型生活とはほぼ対照的に、たとえ一時的な滞在であってもそこに生活する地域住民との相互的な関わりが無くてはならない環境である。参加学生がこのような環境に置かれたときにどのような関係性を創造することができるかは本実践の重要な核の要素だといえるだろう。

以上のように制作、装置（制作物）、意味場の展開の三段階、ことにワークショップ、こへび隊支援、地域生

活の三つの意味場の展開を総じて〈作品〉と位置付けプロジェクトを進行していく。ボランティア的な支援活動や地域生活体験は、従来の美術観では削除される副次的な活動であり、むしろ参加学生にとっての社会体験学習といった方が適切かもしれない。しかしながら、そういった活動に芸術祭「松代商店街活性化プロジェクト」が目的とする本質的な地域活性化が期待できると考えられるのである。そしてまた、そういった活動は明らかに〈つくること〉から派生していく〈コト〉の展開にほかならないあらたな美術の解釈による共同性の創造であり、そのことこそ〈美術〉が学校教育や社会教育の場で展開される一つの根拠となり得ると考えられるのである。

## ・実践プロジェクト実施状況と その教育的視点

本章においては、まずコンセプトの構築から装置の制作及び設置へ至る過程と、現地で実施されたワークショップ等の活動について学生達が記した「現地班記録帳」を中心に分析をおこない、プロジェクトの全容を時間経過にしたがって振り返る。そして、前章において提起された〈意味場の展開〉が如何になされたか、新たな大学教育としての視点が得られたか否か、実質的な検証を試みていきたい。

### 1 制作過程及び大学での準備作業

#### 1) コンセプト

制作にあたり筆者らは2月1日、現地視察をおこなった。視察の目的は、松代の自然や商店街が存在する空間から想起し得るコンセプトを模索し、提示された設置候補の中から希望する場所を選定することであったが、豪雪地である新潟県中山間地域に位置する商店街は、例年並とはいふものの積雪量は多く「芸術祭」が開催される夏季の状況をイメージ出来ないままコンセプトのきっかけも掴めずに帰路につかざるを得なかった。

2月20日、大学において現地視察の報告を兼ねた「芸術祭」の説明会を開催したところ一回生を含む19名の学生が出席した。松代町商店街を撮影してきたVTRを視聴しながら今回参加するに至った経緯を説明し、小谷ゼミ・石上ゼミ共同での参加を正式に表明するとともに、広くゼミ生以外の学生へも参加・協力を促した。

説明会終了後、大学院生を中心に今後の展開について具体的な議論を試みた。その場において確認されたことは、主に次の二点であった。第一に、今回制作する「モノ」は、あくまでもワークショップ等の活動を促す「装置」としての機能を持たせること。第二に、制作活動は

「行為」を基盤として展開することで「装置」への理解を高め、ワークショップ指導者としての自覚を醸造し得るのではないかという点であった。

コンセプトについては、現地でなければ成立し得ない要素を見出すのに苦慮したが、議論の結果、松代町の「光」に着目することとなった。「光」とは、長く雪に閉ざされる地域の人々にとって、つかの間訪れる夏の光は何よりも得がたく力強い癒しとして機能しているであろう存在に注視し、それを増幅する行為は深遠な体験として両者（学生と地域住民）の心に残り、一時の経験に普遍性を付加し得るのではないかと考えたからである。

上記の観点から素材としては複数の相似型が成型可能な型取り技法によって成型される透明FRP樹脂製容器を研磨して仕上げる方針で固まり、更にそれらと対を成すようにミラーを配置することにより、松代の「光」を増幅する機能が装置の基盤となることを確認した。装置の具体的な形状としては様々のプランの可能性が検討されたが、環境との関係性を重要視したため一旦保留とした。ひとまずこの方針より松代の「光」と、さらに容器にたまるであろう「水」という要素を取り込むことが可能となり、その時間と空間でしか共有し得ない唯一の場が開かれるのではないかと考え、前章で示した「光のインスタレーション」の趣旨文を主催者側へ提示するに至った。尚、大学院生達には今後も中心的存在としてプロジェクトに関わるよう要請したが、学部生への関わりについてその時点で有効な在り方を確認できず保留した。又、実質的な制作も設置場所が決定されるまでの間、同じくペンディングとなった。

#### 2) オブジェ制作

5月25日、主催者側から連絡があり設置場所が松代町管理の上町駐車場に決定した。その場所は約140m<sup>2</sup>のアスファルト敷きの駐車場で、周りに日光を遮るような建物等は無く、当に「光のインスタレーション」を展開するのに最適な場所であった。設置場所決定の報を得てプロジェクトはようやく具体的な装置の検討に入った。ある程度の広さと見通しのよさを得た我々は、ある程度高さを持たせた装置のプランを採用することにした。

幅120cm奥行40cm高さ240cmの棚状の支持体四基を二基ずつ駐車場の中央に向かい合うように配置、向かって左側の支持体二基に透明FRP樹脂製の容器50個セットし、反対側の二基にアクリルミラー40枚を固定するプランが決定した。その事実は第2回説明会（6月2日）で報告された。

作業はまず「透明FRP樹脂製の容器」（以下、コーン）

の制作に着手した。それは直径15cm高さ25cmの逆円錐形の容器でその原型となる形を石膏の引型技法で成型することとした。その技術的な傾向と作業内容から彫刻専攻の大学院生を中心にそれらの作業を任せた。最終的に石膏による原型を5ヶ成型し、それを基にシリコンゴムによる割り型を制作した。又、水をためるといった機能を持たせるために内側の形状もある程度の精度が求められると考えたので、先のシリコン割り型から内型となる「中子」も制作した。実際「中子」は石膏原型と同じ形状をしていて、樹脂を封入した後「中子」を深さに注意しながら収めることにより容器としての厚みの調整を行うこととした。ある程度シリコン型が出来た時点で、実際に透明FRP樹脂を封入し成型作業へ移行していった。封入専用の樹脂はあらかじめ専用の塗料を混入して攪拌し、求める色合いになるように調整しなければならない。塗料の攪拌が完了した後、硬化剤を混入する。そして再び完全にムラがなくなるまで攪拌しなければならない。硬化剤の混入比率は1～5%と幅が広い、何故なら（説明書に気温等との相関関係が明記されてあるが）その反応は気温や湿度に敏感に影響を受けるためである。つまり、状況に応じて微妙に加減をする必要があるが、実際は作業者の経験に託される部分が多い。

一連の作業は熾烈を極めた。その主な要因は技術的な経験の希薄さにあったように思われる。硬化剤の量が安定せず硬化時間に斑が出たり、中子がずれて穴が出来たり等。それでも試行錯誤を繰り返しながらコーンの成型を担った学生達は作業に取り組んでいった結果次第にコンスタントに成型できるようになっていった。

9ヶ程度コーンの成型が終わった時点で再度、3回目の説明会を行った。参加者は25名を越えていた。その日はコーンの磨き方と、今後の日程調整についての説明・班分けをおこなった。最後にコーンを磨いてくれる人を呼びかけたところたちまちに9ヶのコーンの担当者が決まった（以降その担当者を里親と呼ぶ）。

研磨作業は本実践における重要な要素の一つである。具体的作業行程は次の通りである。型から取り出されたコーンは多くの場合完全に硬化しておらず表面には粘りのようなものが付着している場合が多い。そういった場合完全に硬化するのを待つか、中性洗剤等で洗浄する必要がある。当然、今回の場合は時間的制約から後者を選択せざるを得なかった。出来るだけ表面の不純物を取り除いた後、実際の研磨作業に入る。研磨は基本的に60番～1200番の耐水ペーパーを使用する。場合によっては金工用の鋸も使用するが、殆どの作業はペーパーでおこなう。

この作業は一つ一つの作業を着実に積み上げていかな

いと完了できない。粗い番手のペーパーでつけた傷を確実に次の番手で消していかないと、しばらく進んでから最初のペーパーでつけた傷が浮かび上がってきてしまう。そうなればすくなくとも発見された傷の付近だけでもその傷を消せる番手までペーパーを戻して作業をやり直さなければならない。

遅々として進まない作業になぜこんなことをしなければならぬのか疑問におもう学生も現れ始める。そんな中で逆にコンスタントに作業をこなして一人完成にこぎつける者が現れる。そうなればその場が特異な盛り上がりを見せ始める。大体800番を超えたあたりから鏡面に近づき始める。それを超えると1000番で透明度が上がり1200番で特有のつやが開始する。最後に研磨剤入りの歯磨き粉で磨きこめば1200番以上の輝きを得ることができる。

完成したコーンが出始めるとその作業をおこなっている現場には不思議な共同原理が発生し、学年を問わずに有効な交流が交わされるようになるのである。前述の歯磨き粉の発見と伝達などはその好例である。この共通体験を自信として携えて学生達はワークショップへ臨むのである。

### 3) 磨くという行為

磨くという行為は従来の美術的領域区分によれば工芸的なアプローチである、と認識されてきた。しかし、筆者は従来から美術の基礎的な能力を養う有益な手段としてその「行為」を捉えてきた。この「行為」は、特に教育学部などの比較的基礎的造形体験が希薄な学生が集う教育現場において、領域という先入観が形成される前に体験すべき美術全般に通底する欠かすことの出来ない基礎体験と捉えている。

現在、学校教育において最も重要視されている概念の一つとして「個性」というキーワードが挙げられるであろう。それは中高の美術科の授業においても同様である。というより、客観的な評価基準を規定し難い表現系の領域においてはなおの事であろう。ややもすると「人と違うことさえすれば個性的である」というような表層的な理解が蔓延しているのではないかと感じざるを得ない現実に出くわすこともしばしばである。そこで筆者は入学最初の基礎授業において、合板で立方体を制作し、塗装・研磨して仕上げるという内容を実施している。当然、新入生はなぜそのような課題を科せられているのか理解出来ないままで参加することになる。その課題はそれぞれの作業工程がすべて連動しており、一つでも疎かにすると先に進んでから予想外の苦勞をすることになる。さらに研磨作業においては、タイミングよく作業を進めて

いかないとすぐに最初からやり直さなければならなくなってしまう。一連の作業を繰り返しながら、各自がそれぞれのスタンスで腰を据えて素材と向き合う必然性に目覚めていくのである。つまり、自分自身の得て不得手を冷静に見つめ、自分なりの関わり方で取り組まなければならないことに気付く。

筆者がその授業において最も注視しているのは個々の学生が無自覚なままにしている自己の内面に宿る「他者」存在、真の意味でのそれぞれの個性に気付いてほしいということである。

#### 4) 支持体制作とワークショップのシミュレーション

支持体制作は諸般の事情により外部に委託することになった。主な要因は第一に日程的な問題が上げられる。予想外にコーンの制作に時間と手間を取られ、支持体制作が手付かずの状態が続いた。第二に技術的な問題が上げられる。あくまでも支持体として抑えた存在として具現化するには、技術的に成し得ないのではないかという点である。そこで知人の木工職人に制作を依頼することとなった。基本的な作業は彼の作業場でおこなってもらい、実際の組み立ては大学内で実施していただいた。適宜、学生達にも作業を手伝うように指示したので、学生達にとってもプロとしてのモノづくりを間近かで見ることが出来る非常に得がたい経験となったのではないかと考えている。

支持体制作と平行して現地で実施するワークショップのシミュレーションを行った。その時点で現地の班編成が完了していたので、それぞれの班長・副班長を中心に実質的な検討を行った。今回のワークショップはアクリルミラーで松代の自然光を増幅し強く認識する目的を担っている、そういった観点から学生が参加者と関わること自体に意味を託し、造形的には飛躍した表現は避けるように配慮した制限が設けられた。

その他、現地班には装置のメンテナンスとしてコーンの掃除及び水やりと装置のコンセプト説明などが義務付けられ基本的な文言の確認がなされた。

#### 5) 装置の設置

発送から設置へ至る作業は予想以上に上手くいったと考えている。中盤の遅れは徐々に回復し、予備も含めて56ヶ制作されたコーンや、ワークショップを実施するアクリルミラー等も発送の前日に梱包し終わり、支持体の塗装及び梱包作業もゆとりをもっておこなうことが出来た。

中一日において7月16日の朝、現地入りしたメンバーは教官2名と大学院生を含む学生5名の総勢7名となっ

た。今回の装置は底面積のわりに高さがあり、安定性に欠けるため比較的頑丈に固定する必要性が生じていた。そこで支持体一基あたり4箇所をアンカーボルトで固定することとなった。アンカーボルトによる固定はまずアスファルトに穴を開けアンカーを固定しなければならない。その一連の作業は基本的に教官がおこなったが、始めて見る作業工程にもかかわらず学生達は進んで仕事を探し作業もスムーズに行われた。結果、支持体の固定作業は、半日で終了し、午後からはその他の部位を固定してゆく作業となった。

全ての部位を固定し終わり最後にコーンへ水を注ぎ込んで「装置」は完成した。初めて出現したそれは、その日の天候(晴天)もあいまって日光によって輝くアクリルミラーと揺らぐコーンの水面は予想以上の効果を発揮していた。

その場に居合わせた人間は、多くの人々の協力の成果として出現した「装置」の存在感に強い充実感を覚えた。思い返せば、大学で行った装置の制作とその他の準備作業は、非常に熾烈なスケジュールの中での作業となってしまった。主な要因は設置場所がなかなか決定されず、保留の状態が続いた等の理由が挙げられるが、プロジェクト全体を進めていく上で学生達にどのような頻度・深度で関わってもらわなければならないか、我々教官側に具体的な方策を持ちえずに進めてしまったことが最も大きな原因だったように思える。最後に当時状況について、一連の作業を中心的な立場で担当した大学院生のコメントを記しておく。

...大学での準備は、学生は指示待ちの姿勢であったと思う。学生は参加の意志はあっても自分が何をしたらいいのかよくわからない、そんな状態であったと思う。(中略)時間も限られていたなかで作品の制作だけで手一杯で、余裕が無かったというのが実際の状況であったが、もっと早期から学生に参加を促していたらどうであったらと思う。

## 2 意味場の展開

本節においては「現地班記録帳」を中心に「ワークショップ」、「こへび隊支援」、「地域生活」等の体験から学生達が今回のプロジェクトを通して何を享受し、<意味場の展開>がどのようになされたか、検証を試みたい。

### 1) ワークショップ

実施したワークショップは基本的に大学で繰り返し行ったシミュレーションで大きな問題はなかった。しかし会期中に台風が接近するという緊急の状態や、暑い日が続いたり、雨が続きたりするなか現場での実施は天候など自然現象に左右されて翻弄する場面がたびたび訪れた。

「ワークショップレポート」8月5日(C班、川瀬)

今日は初めての曇り。雨もばらつき、観に来てくれる人もまばらであった。WS参加もゼロであったが、気になるコメントをもらった。

「...で、これは何の芸術なの??」

何の芸術って何なんだろう、変な言葉だなーと思った。あの駐車場にあるやつは装置なんだよね、装置装置！ここへ来ているんな作品を観ていると、全てのものが“アート作品”に観えてきてしまうんだけど、いちいちアートって書いてあって黄色い看板立ってるのがなんだかばかばかしいというか...変な感じもするようになってきた。トリエンナーレが終わって看板が取り払われて、風景ととけこんじゃったら自然になるのかもな？

「島大の作品について」8月21日（E班、和田）

今日はX班とワークショップをしました。最初は晴れたので久しぶりにいけるゾ！と思ったものの雨が...。結局、水かえと、設置で終わってしまったけど、ちらほらと人が観に来てくれました。しかも一人の年配の方が、島大の作品が一番キレイだと言ってくれました。とてもいい人そんな方でした。個人的な好みだとおっしゃってましたが、商店街の中の作品の中で、一番コンセプトが解りやすく、どんな人が観てもキレイ、楽しいイメージを持ってくれるんじゃないでしょうか、と言って頂きました。私は、ほんの少ししか制作を手伝えなかったのですが、とても嬉しかったです。

以上のように、ワークショップをおこなう過程で学生にとっては非常に得がたい経験やコメントをいただいた様子がこの現地班レポートから読み取れる。そんな中で学生達は気丈にワークショップに取り組み、最終的に装置を完成させるに至ったのである。

## 2) こへび隊支援

こへび隊とは「芸術祭」の運営をサポートする為に結成されたボランティア組織である。彼らは芸術祭の開催される舞台となった地域社会と、そこを訪れるアーティストや観光客等の人々をつなぐ「仲介者」として幅広くボランティア活動を展開している。実際、本学の学生達の活動も、彼らの援助の上に成り立っている。例えば、学生達が寝起きする宿舎は松代町商店街から車で10分ほど行った山中に建つ小学校を利用したものであり、殆どの班が彼らにその移動手段をゆだねていた。

こへび隊といかにして関わるかは現地へ乗り込む直前に真摯な議論を重ねたが、筆者らとしては基本的にその判断を各班の意志にゆだねた。実際の状況から考えれば、当然こへび隊のボランティア活動をサポートせざるを得ないという認識が筆者らにはあったが、あえて言及せず

に現場へ送り込んだのである。

「今日のコへびレポート」8月4日（C班、石田）

今日も「ホワイトプロジェクト」の手伝いで、布を縫って組み合わせていきました。又住民のおばちゃんたちと、作家さんと、こへびの皆さんと、一緒にぬっていきました。おばちゃんたちはぬうスピードがとても速く、さすがが人生経験が豊富であります。今日はものすごいスピードで作業が進んでいきました。おばちゃん達が家に持って帰って家で作ってくれたり、最後のほう皆で力を合わせてぬっていたりした成果であります。皆で一つのものを作ると、出来上がったとき、とても達成感が生まれました。

お昼はおばちゃんたちの差し入れのミニトマトや、漬物、酢の物などや、こへびさんたちのおにぎりや、お茶で空腹をしのぎました。中でも、おばちゃんたちが作ったおにぎりはとてもおいしいです。もはや心使いに感謝であります。

PM9:00から、昼にいたメンバー+で、昼に出来なかった残りの布をつなげるのをしました（宿舎のご飯を食べるところで）、そして約1時間ちょっとで、とりあえず完成しました。6日から展示なので、ガンバです。

「団体生活の中では...」8月13日（D班、北原・稲田）

今日に限らずですが、こういう団体での生活の中では、伝達がどうしても上手くいかず、お互いにイライラしがちです。そうならない為にも、確認や感謝の気持ちを忘れなないようにしようと思いました。（中略）すごいですね。かなり重要だと思います。わかっていてもかなりイライラするけど...！一ひともいっぱいいます。えらそうな人もいるけど...

「こへびの手伝いをしていると」8月14日（D班、藤原）

ここに来てつくづく思ったんですけど、団体行動ってやっぱりなんかむずかしいですねー。うー。まあ、人間ひとりひとりがいろいろ違うから当たり前なんだけど。なんか、新潟に来てからますますおつむがよわっちゃって、頭がまわりませぬ...。こへびの手伝いしてると勉強になることとかも結構あるし。皆同い年くらいの人たちばかりなのに、なんであんなにしっかりしてんの!?ってすごい思いましたね。なんていうか自分がダメなことを思い知った感じです。

「これから終わりまで...」8月17日（E班、和田）

合宿所のシステムをメンバーが全くわからず少し不安...けど、みんな声をかけられるとやさしい人ばかりで安心した。前のD班が帰っちゃって何だかさみしーよ...。アジキ&タムラは初日からこへびの手伝いで、だいぶお疲れの様子。ごめんよー、みんなガンバロ！！

これから終わりまで上手くやっていけるだろうか...!?

「こへびとの対話」8月19日（E班、和田）

川西のこへび隊リーダーのリエちゃんは、本当にしっか

りして、とても同い年には見えず、結婚するならこんな子がいいなと思いました。川西町の作品に10ヶ所以上も連れていってくれました。疲れてるのに...ありがとー。こへびの辛さや大変さを聞いて、ハナからバリアをはるんじゃないくて、もう少しお互いに思いやることも大事なことだと感じました。無理しない程度にね。

こへび隊支援の様子からは、学生達の率直な意見が述べられていて興味深い。思わず挫けそうになる本音の吐露や、中傷。同世代であるはずの彼らが何故そこまで頑張れるのか、出来るのか、羨望のまなざしで見つめるとともに小さな共有に癒される場面も見受けられ勢い良く経験を吸収している様が見て取れる。

### 3) 地域生活

地域生活では「ワークショップ」や「ボランティア活動」を通じて学生達が出会った地域の人々とのふれあいを中心にまとめ、今日的な美術というキーワードがコミュニケーションの手段として如何に機能し得たか、具体的な事例を挙げ記していきたい。

「島大ワークショップレポート」8月5日(C班、川瀬)

夜は、名ヶ山宿舎でバーベキューがありました。違う宿舎の人々や、地元の方も一緒でした。地元なお方々と一緒にしゃべってみた！芸術祭のことはもちろん、島大のこと、方言のこと(またもや)地元のこと、などお話しました。皆さんびっくりするくらい良い人たちです。おいしい蕎麦屋さん、地酒、湧き水の場所など教えてもらったよ。その蕎麦屋のおじさんがバーベキューにて焼きそばを作ってくれました。まかないのご飯も地元のおばちゃんが作りに来てくれるし、スイカや野菜の差し入れはくれるし、街角でお茶を出してくれるし、もう、これは何なんだろう。

「台風対策」8月8日(D班、稲田)

夜、台風対策の為、コーンと鏡の撤去作業をしました。暗い中でごそそと作業をしていたらご近所の夫婦の方が車庫に鏡を置かせてくださいました！その方達はゴーヤを植えて水やりして下さっている方です。で、30か31日にゴーヤ祭りをするそうです。そのころD班はもういない。残念です...

「雨やどり」8月31日(F班、松田)

雨がすごい勢いで降る中、ご近所の武田さんに拾われ雨宿りさせて頂きました。お茶も入れてくださってごちそうになりました。何もかもが美味！これは感動!!おばあちゃんの味！その分、時間をのばしてワークショップやったのですが...

そして、この日は16時からゴーヤパーティーを開いていただきました。早めに行ける人はお手伝いをさせて頂いて、

17時頃には「いただきまーす！」しました。神戸大の二人とこへびメンバー何人も参加。ほろ酔い気分でテンションも。神戸大のみたむらさんのキャラも發揮され、地元の方々と楽しくお話しました！しかし、酔ったオジサマのパワーは、怖い...。(笑)19時すぎにこへび隊の車で迎えに来て頂いて無事帰路に。

「おかえりなさい...」9月1日(F班、竹内)

本日は夏休みも終わりということもあり、来客はかなり少なかったです。そして雨も降っておりました...なのでWSは近所で展示を行っている神戸大の方にやってもらいました。そして、二宮さんにもやっていただくことになりました。その後、通りすがりの中学生にもWSしてもらいました。合計五枚でほとんど完成です。

夕方、商店街の方にあいさつをすると「おかえりなさい」と言われるのが嬉しかったです。

最後に芸術祭終了後、全体を通したレポートを提出した学生が数名いた。その中から興味深い観点到言及しているものを取り上げて本章の締めくくりとしたい。

毎日がむしゃら動き回っていた新潟での生活の中で、私が考えたのは「社会性」ということでした。美術作品がどうのこうの言う前にそれがありません。「人と人をつなぐのに美術っていうのは有効なんじゃないか？」というようなことを言っておられました。美術がそういう位置付けにあることをあの場で身をもって認識させられたと思います。そのきっかけは、やはり芸術祭の運営を担っているこへび隊を手伝ったことや、WS等を通じてたくさんの人と関わりあっていたこと、関わらざるを得ないあの環境でした。そこは社会性とか、協調性がないと前へ進めない、順応も出来ない、というものでした。宿舎然り、こへび然り、島大班内然りです。ずっと集団生活だったので精神的に辛い思いもしましたが、そんな中だったからこそ気付いたこともいろいろありました。それは自分が自分自身で思っている以上にとても閉鎖的な人間であるということでした。それによって自分が組織から浮いてしまったりする感覚を感じたりもしましたが、合わせるのは嫌だし...。でもどうやってこのギャップを埋めればいいのか混沌とする毎日でした。

宿舎でお世話になっていた地元の方々を招待してバーベキュー大会が行われました。本当はちょっとめんどくさかったけど、ぐっとテンションを上げて初対面のおじいちゃん、おばあちゃんと会話してみました。すると意外に純粋に楽しんでいる自分がいました。作品の話や、美味しいおそば屋さんや地酒の話、名ヶ山小学校の話...。そんな風に、芸術祭や地域の話目をダシにお互いが夕食を楽しんでいて、あることに気付きました。たとえ自分のテンション

が低いときでも、笑顔を振りまき、大きな声ではきはきしゃべることは、偽善ではなくマナーとも言える、社会性である！ということでした。最初ちょっと苦労してもお互いが楽しめるし、よく考えてみたら今回の芸術祭自体がその積み重ねで成立しているんでしたね。(中略)

そして私達の装置についてですが、あれもまた人と関わることを「作品」としていて、それをそうすることとしたコンセプトの意味や、中身をようやく理解したような気がしました。言葉ではわかっているつもりだったんですけど、やはり行ってみないとわからないと思います。(中略)

現地に行き、設置された装置がちゃんと存在感を持っていて、光が当たると確かにきれいだったので自信を持ってお客さんに話をしたり出来ました。

これらのレポートから短絡的に教育的効果を見出すことは危険かもしれない。しかし、このレポートが筆者にとって興味深いのは、かなり丁寧に行ったと自認している準備活動(芸術祭参加への導入)が意外と表層的であったという事実と、日常から隔絶され、唐突に現場に叩き込まれることによって発揮される(気付かされる)個々の内なる力のしなやかさが併記されている点である。

思い返すと「芸術祭」の具体的な内容が全く示されないまま学生を引きつけ続けた今回のプロジェクトは、プロジェクト自体に強い吸引力が内在しているのではなく、その「場」を求める学生達の中にこそ真の「意味」が隠されていたのかもしれない。

## まとめ

以上の本実践における造形活動を通じた地域や社会との関わり方の検証において、いくつかの知見と可能性を見出すことができた。第一に、〈他者性〉の認識が表層のコミュニケーションだけによるものではなく、〈自己〉が外部と対峙した結果として深層の〈他者〉を認識するということである。「松代商店街活性化プロジェクト」の参加ゼミを軸に会期中松代町で開催された美術教育シンポジウムでは、芸術祭出品者でもある川保正から重要な問題提起がなされた。<sup>7)</sup>その要旨は、〈他者〉との関わりは深層の意味において円滑なコミュニケーションだけにあるのではなく、〈個と個〉の衝突やうねりによる葛藤から本来的な〈他者〉が立ち上がってくるのであり、そういった観点から今回のプロジェクトを検証する必要があるとの内容であった。半年に及ぶ本実践過程で参加学生の多くが楽しさや喜びと同時に、〈他者〉と関わることの困難さや辛さを感じていることから本来的な〈他者〉を意識する重要な機会であったと見ることができるだろう。特に現地へ常駐した参加学生が日

誌に吐露した関係の不具合や帰島後に教官へ手紙を宛てた参加学生のいずれもが、〈他者〉を強く意識し〈自己〉に捉えかえされる内容であったことは極めて興味深い。

第二に、教育的視点から様々な関係性を調整し方向性を築いていく行為の重要性である。本実践においては、その過程で様々な関係性が生成された。例えば、素材や形態、色彩が互いに持つ特性から生じる〈モノとモノ〉の関係性、そういったモノに対して積極的に関与することによって行為者自身が変容していく〈人とモノ〉の関係性、複数の人が関わる場面での〈人と人〉の関係性などがとりあえずは挙げられる。これらの相互の関係性によって一連のコンテキストが生成され〈コト〉となるのではあるが、このような複雑な相互作用のコンテキストは絶えず流動的である。その流動的なコンテキストに不断に秩序を与え、また、次の場面では再構築していく相互関係性構築的行為が美術教育の射程を超えて広く教育的視点として重視されるべきであると考えられる。<sup>8)</sup>それぞれの〈私〉が様々な関係性を〈動態〉として捉え、より良い状況を模索しながら状況そのものを構築していく行為は、美術や造形活動に内在されるものではあるけれども、本質的に私たち人間の生活に不可欠な根元的な行為だと考えられるのである。

第三に、美術の自明性の検討から地域や美術教育、社会教育の場で展開される造形活動の可能性である。本実践では、造形活動が地域社会と関わりうる根拠を「領域」や「作品」といった美術が抱える自明性を問い直すかたちで一定の方向性を導き出した。「領域からの発想」を脱し「〈行為〉からの発想」を重視した本実践は、作品の範疇をモノから〈コト〉へと転回しうる可能性を提示し得たと考える。このことは造形活動が、モノを通じた鑑賞対象としてあるばかりでなく、〈他者〉がその〈場〉に関わることによって〈コト〉をつくり、つくりかえるといった状況から、地域や社会そして教育へ開かれたあらたな通路として機能しうる活動であるといえる。

また、本実践を通して今後へのいくつかの課題が浮上した。第一に、実践プロジェクトの企画部分を学生に任ずることができなかった教官側の反省である。これは日程的な問題によるところが大きい、教官と数名の学生での検討になってしまった上に、参加学生が五月雨式に増えたことによって全体の趣旨や方向性を伝えきれず、しばらくの間受け身の状況に置かせてしまったことは大きな反省点である。

第二に、本実践がイベントとして成立したことの功罪である。国内外で一定の評価を得た芸術祭というある意味権威化した土壌の上で成立した本実践は、地域住民の

多大な協力があってはじめて成し遂げられたといっても過言ではない。その功罪は例えば、参加学生と地域住民との関係性が想像以上に円滑であったことは検討の余地を残したといえる。穿った見方をすれば、地域に見知らぬ者が見知らぬモノを置いて活動を展開すればなんらかの軋轢を招くのが当然であろう。地域のサポート体制が十分に整った上での実践であったことは明記しておきたい。また、参加学生にとって非日常としてのイベントが<点>としてではなく、彼らの日常の様々な活動や学びの過程に<線>として位置付けられるかという点も検討の余地を残している。

第三に、ワークショップや表現形式の固定化への危惧である。とりあえずの結果と成果が得られた本実践ではあるが、その成果が再び「ある安定した」ワークショップや表現の形式として固定化することを常に意識的に警戒する必要があるだろう。ワークショップや表現という<コト>の展開は、本質的にモデルケースを忠実にトレースすることでは成立し得ないことを今一度確認しておきたい。

以上の点をふまえ、今後さらに造形活動を通じた地域への関わりの実践とその検証及び様々な場面での美術教育プログラムの開発・検討を継続的にこなしていきたいと考えている。

注

1) 村田真「第2回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003総合ディレクター:北川フラム氏に聞く」artscape,2003,http://www.dnp.co.jp/artscape/view/focus/0301/kitagawa.html

2) 長田謙一「生成する美術へ-<美術/教育>の転回-」『上越教育大学美術教育研究誌 美と育No.3』,上越教育大学芸術系教育美術講座,pp.5-12,1997

3) 佐藤賢司「脱領域と美術教育-教員養成大学における実践のためのノート-」『上越教育大学美術教育研究誌 美と育No.5』,上越教育大学芸術系教育美術講座, pp.19-28,1999

4) 中村雄二郎『共通感覚論』,岩波書店,pp.2-3,1979

5) 川俣正「ものからことへ」,『先端芸術宣言!』東京芸術大学先端芸術表現科編,岩波書店,p.189,2003

6) 芸術祭ノミネート時に提出した作品概要に鏡の枚数など当初の計画から変更した箇所に修正を加えたもの。会期中各トリエンナーレセンター等で販売されたガイドブックにはこの文章の要約が掲載された。

7) 会期中である8月18日松代町にて開催された美術教育実践学会美術教育シンポジウム「芸術の他者 教育の他者」において発言されたシンポジスト川俣正の問題提起の聞き取りによる。

8) 相互関係性構築的行為については以下の論考で検討している。

小谷充「相互作用的行為としてのデザイン教育試論I - 実践検証による<デザイン・プロセス>の再考-」,『大学美術教育学会誌no.34』,大学美術教育学会,pp.153-160,2001

小谷充「相互作用的行為としてのデザイン教育試論II - <人とモノ>の相互作用についての検証-」,『大学美術教育学会誌no.35』,大学美術教育学会,pp.161-168,2002

執筆分担

石上が第3章を担当し、その他の章は小谷が担当した。付記

以下に参加学生の氏名を挙げ敬意を表したい。

[参加学生] 藤野孝之/門脇信治/若槻菘/石田暁子/川瀬一絵/大司美智子/福田茜/山根利江/安部みずき/稲田美穂子/北原奈美/佐藤真智子/林妙香/林佐代子/藤原文/宮本真理子/安田陽子/和田有加/阿式景子/安部景子/大畑円/岩本綾子/宅野敏和/田村美紗/西島彩子/松浦由希子/松田絵梨/岡悠衣子/竹内美貴/宮井久実/李綾子/佐藤静香/島田弥希子/高橋明子

[修了生・卒業生] 金山広毅/山本洋平/金山崇

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003 「松代商店街活性化プロジェクト」  
島根大学／小谷充ゼミ・石上城行ゼミ

## 「松代・光のインスタレーション」 図版資料



■展示初日の装置の概観





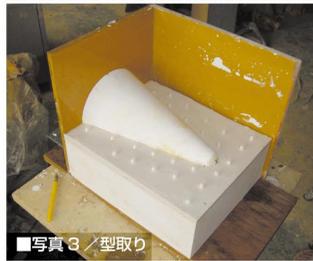
■写真1 / 引き型工程の状況



■写真2 / 引き型工程の状況



■写真4 / 外型と中合を使ってFRPを硬化



■写真3 / 型取り



■写真5 / オブジェ初号の完成



■写真6 / 研磨作業の状況



■写真9 / 研磨作業の状況

### 制作状況とワークショップ計画



■写真11 / ワークショップ計画



■写真7 / 研磨作業



■写真8 / 作業に参加した卒業生



■写真12 / ワークショップ計画の状況



■写真10 / 支持体の塗装作業



■写真 13 / 現地視察時 (2月) の上町駐車場



■写真 14 / 設置開始



■写真 15 / 作品プレート

### 現地搬入・設置作業状況



■写真 16 / アンカーを打ち込み、安全を確保する



■写真 17 / アクリルボードを試く学生



■写真 18 / アクリルボードの固定



■写真 19 / 配色を考えながらのオブジェ設置



■写真 20 / 水を貯めて仕上げ



■写真 21 / 炎天下での地域の方との共同製作



■写真 22 / 学生判断でパラソルを現地調達



■写真 23 / 上越教育大学の学生と共同製作



■写真 24 / 子どもとの制作



■写真 25 / 作品を解説する学生

### ワークショップの状況



■写真 26 / 子どもとの共同製作



■写真 27 / メンテナンス



■写真 28 / 観光客への作品解説



■写真 29 / 作品解説



■写真 30 / ワークショップを説明する学生



■写真 33 / 最終日の状況。40 枚の「かたち」が記述された。



■写真 31 / ツアー客に対応する学生



■写真 32 / 共同製作後に鏡面を取り付ける

### 設置場所での様々な関わり>



■写真 34 / こへび隊支援 (建築系作品の受付)



■写真 36 / こへび隊と地域住民のカラオケ大会



■写真 37 / 設置場所斜め向かいの室岡さん主催のゴーヤパーティ。ゴーヤは設置場所に実ったもの。



■写真 35 / こへび隊支援 (ドリンクの販売)

### こへび隊支援と地域住民との関わり>



■写真 38 / 突然の豪雨に困惑する学生に「雨宿りを」と招いてくださった地域の方々。